和音と旋律（音）の協和感について
―幼稚園教諭・保育士養成課程におけるコード伴奏法の指導の課題―

水　町　　愛

About the sense of harmony between chords and melody (sound)
-Issues of teaching chord accompaniment in kindergarten teacher / nursery teacher training course-

MIZUMACHI Ai

Ⅰ．はじめに

保育所や幼稚園での保育活動における音楽教育は、音楽そのものの知識や技能を習得させるための教育というより、むしろ音楽を通して行う教育に重点が置かれることが多い。ここでの後者は、音楽の持つ様々な特性や機能を用いて行う教育であり、そのような保育活動のねらいは音楽から離れたものである場合も多い。一方、保育者養成校での音楽教育は、それらを実践できることをねらいとしながら、むしろ前者に重点を置くことになる。例えば、本学の幼稚園教諭・保育士養成課程（以降、養成課程）においては「音楽」「器楽Ⅰ」「器楽Ⅱ」の基礎的な学びを踏まえ、その先に設けられた「器楽Ⅲ」「器楽Ⅳ」「器楽Ⅴ」の授業においては、理論を深め、基礎技能を伸ばしながら、それらを効果的に用いた応用実践的な内容を演習形式で学ぶ。これら４年間の学びを通し、大きく分けて「聴く力（感性）」と「表現技能（技術）」を伸ばすための内容を組み立てているが、やはり音楽を用いた保育活動を実践し、子どもの感性に寄り添いながら活動を展開することができるまでの力をつけるためには、音楽の基礎的なリテラシーを十分に身に付けることが必要不可欠となる。そこで課題に挙げるのが、受講学生の持つ音感であり、とりわけ音やハーモニーに対する協和感である。

受講学生の「聴く力」の実態として、「注意深く聴く」という意識や「本物やより良いものを選ぶ（聞き分ける）」という取捨選択の能力およびそれに必要な感性の育ちに課題を感じている。具体的には、コード伴奏の技術を習得するための学習において、実際に耳にしたハーモニーが協和した響きか不協和な響きかということが正確に聴き分けられない学生が少なくないという実態に直面するのである。しかしそれは、学生自身が幼少期から受けてきた教育や環境、あるいはその他の経験的な要素に起因するものではないかとも考える。そこで、本研究では受講学生（１～４年生）を対象に調査を行い、音感にまつわる実態を把握するとともに、コード伴奏法の理論的な学習のあり方について検討する。

Ⅱ．音感の形成

音感形成の時期については臨界期が存在し、脳科学的な観点からもその最も適した時期は２歳から６歳までであると言われる。また榊原（2004）によれば、絶対音感の習得の可能性は万人に備わっており、加齢に伴いその可能性が低下していくとも考えられている。音や音楽に対する感性が著しく発達する幼少期において、与えられる音楽経験や音環境がその成長発達に与える影響は大きい。例えば、仮に不協和音で伴奏された演奏を（生活の歌の伴奏などで）日常的に繰り返し聞いた子どもは、感覚の慣れやそこに伴う「楽しい」という感情も作用し、次第に「不協和な響きで聴き心地が悪い」とは感じなくなるのではないだろうか。そうすれば、日常を過ごす保育環境を通して感性が鈍化することも避けられない。限られた生活環境の範囲内で感性を育む幼少期の子

どもに対し、保育や教育に携わる者の持つ感性が及ぼす影響は大きいと言える。

Ⅲ．調査

受講学生の音感に関する実態および学習歴や個々の経験値との関連を把握することを目的に、九州ルーテル学院大学の人文学科および心理臨床学科に所属し、幼稚園教諭養成課程で学ぶ４学年の学生を対象に調査を行った（2019年７月末）。調査では、音または旋律に和音を組み合わせた９つの課題を聴き、その率直な聴き心地を５段階（心地良い／やや心地良い／よく分からない／やや不快である／不快である）で回答してもらった。なお、課題には、音（または旋律）と和音とが完全に協和しているもの、協和した演奏の一部に不協和な部分が含まれたもの、および、全く協和していないものが混在している。また、対象者にはそれぞれ幼少期から現在に至るまでの音楽経験（環境）についても尋ねた。調査結果を分析し、音楽経験との関連についてもその傾向を探った。また、受講学生の実態や傾向に沿った現在の指導内容や方法について見直し、今後の展望と課題について検討した。

結果は以下の通りであった。

まず､コードの理論や演習を学ぶ前段階（１年次）においては、やはり高い割合で聴き分けが困難な状況にあることが分かる。そして、関連する内容を理論的に詳しく学ぶ２年前期を境に正答率が上がっており、これは入学前までの音楽経験値の割合に照らしても向上していることが分かる。また、協和／不協和の判断がつかない（「よく分からない」と回答する）学生の数も２年前期を境に減少している。旋律課題に対する調査結果を見ると、４年次には協和しないハーモニーに対して協和感を覚える学生が０名になっている。本調査は同じ対象の追跡調査を行ったものではないため、学年によって個々の経験値の分布は異なり、学習歴のみがこれに影響しているとは断定できないが、学習を経て率直に聴いて判断する力が向上傾向に転じていることはおおよそ確認できる。しかし同時に、学習後も２割程度の学生においてはまだ不協和な響きに対して鈍感であることも把握でき、この点は今後の課題として捉える。

Ⅳ．保育士および幼稚園教諭の養成課程に求められる音楽指導

１．子ども主体の音楽活動を支えるために

幼児期の音楽教育では、保育内容の領域「表現」にも明記される通り、子どもが感じたことを形に表そうとする表現の過程を丁寧に扱うことが重要である。保育者が子どもの想像性に寄り添うことなく指導者本位の導き方をすれば、子どもの想像性や活動の主体性は奪われてしまう。では、子どもが音楽的な表現活動を展開する際の、保育者のよりよい援助のあり方とはどのようであろうか。

まずは子ども主体の表現活動を支える要素として、

和音と旋律（音）の調和感に関する調査（九州ルーテル学院大学2019年７月）

課題１）協和するハーモニーを聴く	１年生	２年生	３年生	４年生
協和感を感じる	76.5	83.6	81.8	82
不協和だと感じる	9.5	9.2	7.4	7.8
よく分からない	14.7	7.2	10.8	9.3
課題２）不協和なハーモニーを聴く	１年生	２年生	３年生	４年生
不協和だと感じる	69.9	91.4	83.7	93.1
協和感を感じる	17.6	3.3	7.1	0
よく分からない	11.8	5.3	9.2	6.9
課題３）部分的に不協和な響きを持つ旋律を聴く	１年生	２年生	３年生	４年生
部分的でも不協和な感覚を敏感に持つ	20.6	39.5	48.6	47
部分的な不協和感に気付かない（気にならない）	55.9	39.5	29.7	38.3
よく分からない	23.5	21.1	24.3	14.7

数字は％

保育者には柔軟な感性と演奏（あるいは伴奏）テクニックが求められる。子どもの発想(空想や想像力)を柔軟に受け止め、それらをいかに引き出すかについても、これを導き支えるのは保育者の感性である。また、テクニック面で求められるのは、既存の伴奏譜の通りに正しく演奏するだけでなく、ある程度の即興的な技法も含め、音楽を自在に操るまでの演奏技能である。リトミック等において求められる即興演奏法もまた、子ども主体の表現活動を支える技能の一つである。さらに、即興的な演奏を支える要素の一つとして、保育者の音感もまた重要な要素であると考える。乳幼児の音感形成の側面から考えても、まずは正しく協和感の得られる良い音環境を常に用意できること、その上で、注意深く聴くという力（あるいは感覚）を育み、違いを聴き分ける力を養うことが求められよう。

しかし、協和／不協和を正しく聴き分ける力や音楽を自在に操る演奏技能は、本来経験値に伴い自然と身に付く場合が多い。本学の養成課程に所属する学生は、例年全体のおおよそ５割前後が初心者もしくは初級レベルの技能と経験値を持って入学する。そのため、約半数を占めるこれらの学生は、経験値の乏しさゆえの困難さを抱えるのが実情である。

では、４年間という学習期間において、それも音感形成の時期をとうに過ぎた年齢の大学生が効率的にそれらを習得するにはどのような学習方法が有効であろうか。

音楽において、音または旋律と同時に響く和音に対し、人はその響きの聴き心地に様々な感覚を持つ。それらの聴こえ方や感じ方には個人差があり、そこには個々がもともと持っている感覚の違いや、これまでの音楽経験の差などが影響している可能性も考えられる。養成課程のための音楽関連の授業の中では、保育活動で用いる子どもの歌にピアノ伴奏をつけながら歌うという演習に多く取り組む。さらには、伴奏譜の無い（歌唱部分の旋律のみの）楽譜に正しく伴奏を付けて演奏する方法についても学ぶ。しかし実態として、時には読譜もしくは伴奏の付け方を誤ったまま気付かずに演奏する学生の姿を目の当たりにすることも少なくない。不協和な響きに違和感を覚えないまま演奏しているのである。耳でその響きに違和感を覚えることができれば、伴奏の誤りに気付き、協和感の得られる響きを求めて正しい伴奏に修正することができるのだが、耳で捉える協和感に個人差があるとすれば、まずはそこが大きな課題となる。

２．現在の授業形態とコード伴奏法の指導について

前述の通り、本学の養成課程における音楽指導は、次のように系統立てて行っている。

まず「音楽【幼】」（１年前期）では楽典を中心とする音楽理論を取り扱い、主に読譜指導を行う。一斉授業で行う演習科目であるが、ソルフェージュの演習においては個々の習熟度を確認しながら指導の徹底をはかる。また、これらは同年次に並行して開講される「器楽Ⅰ」（１年前期）および「器楽Ⅱ」（１年後期）の基礎技能習得のための授業にも関連付けながら、楽譜を読む力と表現（演奏）する力を同時に育む。これらの授業を通して理論及び技能の基礎基本を身に付けたことを踏まえ、「器楽Ⅲ」（２年前後期）ではコード伴奏法について学ぶ。ここでは、コードの基本からコードネームの読み方、主要な調のスリーコードやセブンスコードなどについて学び、到達点としては、コードネームを見て歌の伴奏付けができること、そして（歌などの）旋律のみの楽譜のコード判別をして伴奏付けができることを目標としている（ここで弾き歌いレパートリーや応用実践力を伸ばす)。そして、これらの内容は「器楽Ⅳ」（３年前後期）での即興演奏法にも繋がり、次いで「器楽Ⅴ」（４年前後期）で学ぶリトミック指導等で応用

保育士および幼稚園教諭養成課程における音楽指導（2021年度）

科目名	履修年次	学習内容
音楽	１年次前期	音楽理論および読譜指導
器楽Ⅰ・器楽Ⅱ	１年次前後期	基礎技能および伴奏（弾き歌い）技能の習得
器楽Ⅲ	２年次通年	コード理論およびコード伴奏法（コード判別法を含む)、模擬実践等
器楽Ⅳ	３年次通年	創作および即興演奏法、歌唱表現法、器楽合奏指導、模擬実践等
器楽Ⅴ	４年次通年	リトミックの概論および指導法、就職試験対策、卒業演奏発表会等

される。

コード伴奏法は、主旋律のみの楽譜に付されたコードネームを読み取り伴奏をつける方法のことである。あるいは、主旋律のみの楽譜から協和するコード（和音）を判別して当てはめ、ハーモニーをつけて演奏する方法のことをさす。本学における指導の内容と方法は次の通りである。

まずコードの仕組みを理論的に学ぶ段階から入り、コードネームの読み取り方を習得する。この時、耳で聴くことで得られる協和感と、その感覚をもたらす仕組みとを照らしながら指導することを心掛けている。これは、既に耳からの感覚でコード伴奏に慣れている学生や、耳では上手く協和／不協和を感じ取ることができない学生の、双方への理解を徹底するためである。指導方法としては、鍵盤楽器上で自由に音を探しながら当てはまるコードを探す方法も考えられるが、演奏全体のハーモニーを耳で確認する工程は敢えて最終段階に行うようにしている。仕組みを理論的に理解できる段階までは机上でのみ（音を出さずに）学習し、コード判別や理屈に沿う伴奏付けについて考えた後に協和／不協和の感覚を音で確認する。このように、コード判断の指標として耳の感覚を頼らない手段を取ることにより、個々の経験値や音感が強く影響することなく、理論的思考に基づいて課題に取り組むことが可能になる。また、正確な理解をより深めることに繋がっていることも、音楽経験値の高い学生の学習成果から読み取ることができる。

この方法により、２年次にはコードネームを見ながらの簡単なコード伴奏であれば可能になる。さらに、自分なりにコード判別をして伴奏をアレンジすることや伴奏を簡易化することなども可能になる。３年次には、判別の方法を応用しながら簡単な創作にも取り組み、「創る」から「弾く」までの時間的な距離を少しずつ縮めることで即興演奏法の習得へと繋げている。初級レベルの学生にとって即興演奏へのハードルは高すぎると敬遠されがちであるが、これらの段階を経て取り組む簡単な即興演奏課題（習熟度チェック課題）では、例年受講生全員が条件を満たして達成している。

Ⅴ．今後の課題

ハンガリーの作曲家コダーイ・ゾルターン（1882-1967）は、読譜や記譜の能力のことを「音楽的語彙」と表現している（L. チョクシーら，1994）が、読譜力や記譜力は言語を操るための語彙と同等に音楽のあらゆる表現活動を行う上で不可欠であると言える。そして、音楽理論の習得はそれらのリテラシー獲得を支える重要な要素となる。

今回の調査では、養成課程で学ぶ学生の音感にまつわる実態を把握した。また、本来直感的な感覚である音感について、その協和／不協和の感覚を裏付けるしくみを理論的に学習することを通し、より感覚が敏感になり、あるいはより正確に身に付くようになるとの可能性も改めて確認した。

以下に今後の課題を挙げる。

現在の指導の方法や内容の有効性が確認できたことから、今後は方法をさらに検討し、達成度を高めていきたい。方法としてはやはり、聴覚からの感覚に頼らずして協和／不協和の響きをもたらすしくみを理論的に解釈する力を養うことを大切にし、そのための段階的な指導を丁寧に分かりやすく行うことが重要である。また、経験値の差に関わらず、演奏（伴奏）技能の自由度を高めるための工夫についてもさらに検討を重ねたい。例えば、コードを即座に読み取る（予め多くのコードを記憶する）というハードルを下げる方法として、根音のみを用いて伴奏をつけることから取り組むなどの方法も一つである。また、子どもの歌で多く用いられる特定の調については、音階およびカデンツを覚え込むことにより、コード伴奏も運指感覚的に対応しやすくすることなどが考えられる。これらはいずれも受講学生の音楽経験値の差が大きく影響しないことを考慮した方法であり、まずは達成感を持つことにより学びの抵抗を減らすのではないかと考える。同時に、経験値が高い場合に陥る問題を解消する方法としても有効ではないかという点も検証したい。さらに、簡単な創作課題に取り組むことにより旋律に調和する伴奏の仕組みへの理解がより深まる傾向が既に確認できていることから、創作課題への取り組みが即興演奏やコード伴奏のテクニックを柔軟にする可能性についても今後さらに探りたい。

文　献

榊原彩子2004「なぜ絶対音感は幼少期にしか習得できないのか？－訓練開始年齢が絶対音感習得過程に及ぼす影響－」,『教育心理学研究』485-496

L. チョクシー，R. エイブラムソン，A. ガレスピー，D. ウッズ1994「音楽教育メソードの比較」全音楽譜出版社

文部科学省2018「幼稚園教育要領解説」フレーベル館